

## 仮り園舎から新園舎への引越し

### 赤羽美代子

R園は、1984年2月に、教会と幼稚園舎改築の為、仮り園舎に移転をしました。移転先は、明治時代に活躍した富豪の広大な屋敷跡です。仮り園舎周辺一帯は、ホテル、各国大使館、官庁街に囲まれて、人の波、乗り物、騒音の世界です。

しかし、この屋敷跡に一步入りますと、まろやかな風の音、枯れ枝の所が、何か明るい陽光の暖かき、静寂が語るおしゃべり、神様のプログラムが確かな形で進められている場所です。都心の別世界で、幼児と教師、2匹の兎たちは、次の様な2年間を過ごしました。

園庭の芝生を囲んでいる古樹たちは、鳥の囀りをこぼさない様、優しく枝を広げています。又、森の風は戯れ上手です。木の葉は風の縫もれと、ざわめき遊び、大笑いをします。早朝の草花は、透き通った「中だれ」を転がせて見せてくれます。幼児たちは春風吹太郎に追いかけられ、柔らかい頭髪を空間に流します。

その様子を見ていた2匹の兎は、狭い小屋の中から、両耳を立て両足を揃えて「私も入れて、お願いよ」と云うのです。或る日「先生、兎のハネちゃんが小屋から出て、お庭で遊んでる」というMちゃんの声に、子どもたちと先生方は、逃げまわるハネちゃんに「よい子、よい子、こっち、こっち」と呼びわり、追いかけて回します。

その日以後、2匹の兎から「狭い兎小屋から出て芝生を馳け回りたいの」と云う、強い要望があり、全員で受け入れました。

自由を選んだ兎ちゃんの生活は、時にはドラ猫の出現という危険が待ち構えています。

そんな或る日、ドラと兎の小ちゃんが顔を付き合わせました。相方がじーっと互いの顔を見合わせた後、何か挨拶の様な振りをして、相方は別れました。その日以来、2匹の兎は、まったく自由に、森の時計に合わせて、自分たちの小屋を出入りする生活です。

又、時には、自然は敵しいものとなります。夏には、蚊、虫、蝦蟇ガマガエルのおつき合いです。蚊の総攻撃のお時間は、園児の登園時間と午後4時過ぎから始まります。年令不問、相手かまわず、チクリ、チクリと刺しまわり、味見をしてくれます。

「Tちゃんゴメンナサイ！」ピチャリ。「あ

っ先生の頬ぺたに！」ピチャリ。両手を上。下に打ち合わせ小走りにリズムをとった足どりで、あちらでも、こちらでも、幼児と教師の蚊取り音頭の踊りが始まります。

夕方からの御出勤は、太った大きな蝦蟇たちです。芝生一帯は蝦蟇の天国となります。

7月の夕べに父母会が開かれました。講師の先生がお帰りの時に、「先生、足元に気をつけて下さい。蝦蟇を踏みますよ」「大丈夫ですよ。私は生物が専門ですから」「そうでしたね。安心しました」「さようなら」とお別れし、先生は芝生の中を立ち去られました。が、2、3歩行かれたと思うと「ヒャー」「ウヘー」「アレレレ」と、先生のお声の上に乗せて、私たちの心配の声、蝦蟇の逃げる音に送られて先生は、よろめき歩きで去られました。

冬は、プレハブ園舎の冷たい事、2年目の

11月には、先ず教会が引越して行きました。

住人が去った後の建物は、ガラーンとし、異様に広びろとしています。幼児と教師の声が建物内にカーンと響きます。グレー色の冷たさが、身に染みます。しかし子どもたちは、礼拝堂、建物内の各部屋、お風呂場等を、頬を赤くして、スクーター、自転車で、自由自在に駆け巡ります。落ち着いた部屋では絵本を読み、工作と遊びがつきません。

1985年12月、まるで、ディズニーの世界の様な、ファンタジックな生活に終止符を打って、40数名の幼児たちは、新園舎に引越しました。

新しい年の1月より、新園舎にて、3学期が開始されました。

丘の上の新園舎の周囲一帯は、A・R・K計画（赤坂・六本木地域総合開発事業）により再開発が行なわれました。近代化という名

のもとに、ビル群の連立です。人間社会から交渉が跡絶えたかの様に、冷えびえとした街となりました。新時代の乾いたビル風が吹きまくりです。

園庭は、大幅に狭くなりました。掘り返された煉瓦や、欠けらが埋められた土の庭には、木、花は植えられませんが、せめてもの土の庭が感謝です。ホール、各部屋は、礼拝堂の階下に位置し、地下園舎となりました。

神様が自然界の中で、幼児中心のプログラムを、確かな形で進められた仮り園舎から、まるで、反対の裸園庭に引越しました。園舎周辺は、企業社会がキラキラと光っています。

先ず、新園舎の、園庭で2つの行事が行なわれました。①運動会。②移動動物園、と云う、どちらも土地面積が、要求される楽しい行事の代表です。

①運動会のある一場面を紹介します。

運動会のプログラムの後半、パパたちの出し物、飴食い競争が始まりました。私も参加する羽目となりました。

私は白い小麦粉の中に頭をつっ込んで、夢中で飴捜しですが、あれ不思議、飴は1個も見つかりません。そんな時、突然、コッソと頭を押されて、顔面は想像通りの真白け。思いきって目をあげました。その瞬間、私の目にとび込んできた映像は、私の紛をふいた顔をじーっと見つめる、心配そうな幼児たちの視線でした。まるで、スペインの画家、エル・グレコの描いた、ひたすら祈る聖人のまなこ、にも似た(少々、オーバーな表現ですが、その時に感じたままを記します)顔、顔、顔、が並んでいるではありませんか。私のすぐ前に立っているのは、まだ言葉の足りない、年中組のM志君と、年少組のKちゃん

が「先生、どうしたの?」「大丈夫?」とても云いたげな表情で、両手を差し出し、私を助けようと、努力をする姿でした。

一瞬、感激のあまり、私の心は何か、まか不思議な世界に案内された様です。私の耳は賑やかな運動会の音、人びとの声、全ての音が静止してしまいました。人の世にも、音の無い時間があるものだなーと、ふと思った瞬間でした。

運動会を園庭で開くには、先ず、土地の面積を確保する事から始まるのは当然の配慮ですが、幼児は面積うんぬんを乗り越えて、教師と幼児の上等な繋がりつなを保ってくれるものだと思いました。

広びろとした運動会、狭い庭での運動会も何か一つ、大切なものが輝き満ちていれば、幼児は狭い場所が、大海原にもなれば、大砂漠にも広がり、限りなく広がりを見せてくれ

る、天才揃いである事を、しみじみと感じました。猫の額程の園庭に、私たち教師の心の狭さが比例しては大変な事になると、普段の保育から注意をしていたのですが。

新園舎での運動会は、周辺一带を利用した狭い園庭での、広い運動会になりました。

②園庭で移動動物園を開きました。

11月上旬、園庭には、動物村から、小動物が来ました。園児、新入園児、近くの施設のお友達を交えた、動物と幼児が遊ぶ、賑やかな日です。先ず、園庭の真中に小さな柵が作られ、アヒル・兎・鶏・その他の小さな可愛らしい動物たちが柵の中に入れられ、首を伸ばしたり縮めたり、のそのそ、ピョンピョン、歩き回ります。その他、犬一匹、羊一匹、針ねずみ、箱の中にはヒヨコ、小さなねずみ。近代砂漠の様なビル群の中に、小さな動物と幼

児の、ほのぼのとした空間が出来上りました。

幼児、動物たちは、外からの刺激に犯されず自己の世界で、自然な交流を持ちました。

其の日、園庭はやや混み合いましたが、子どもたちの心は、全てを忘れて動物に集中し、狭い庭も動物園に変身しています。遊具も喜んで、今の時を共に生きている様でした。

幼児たちは、広びろとした場所から、全てが小さくなった環境へと移りましたが、その事を心配したのは私たち教師のみであった事は、嬉しいやら、恥かしいやらで、新園舎での一年目を迎えました。

R園は大人社会の真中に位置づけられました。神様は、R園がこの地で、どの様な役割を果す様にと、この場をお与え下さいましたのでしょうか。

④園舎周辺へのオアシスのような役割。

私はよく、アラブ方面に旅をします。茫漠たる砂漠を旅する時、人は思考を停止させられます。思いがけず、水の豊かな、緑が滴る美しい村に辿り着いた時は、ホッと一息ついて、生命の躍動を感じます。

⑤聖書の中のガリラヤ湖のような役割。

聖書の中に、ガリラヤ湖という名が出てきます。ガリラヤ湖は、その周辺の土地に、豊かに水を流し込み、花本草を育て、実を実らせ、人びとの楽園にしています。又、死海はその周辺に一切、水を与えず、潤さず、湖の水は何処にも流れ出ないと聞いています。当然、死海周辺は、塩の塊りが続き、実りのない世界の果てを思わせる影色です。(死海には、大変気の毒な例話で、すみません)

⑥嬉しい役割。

R園の周辺は、ともしれば、幼児の柔らか

い心が弾き飛ばされそうな、厚く冷たい、コンクリートの壁が堂々としています。

小さな少数のR園は、この様な街中の、ほんの一握りの幼児集団です。幼い子ども一人一人のエネルギーが、この場所で、この園舎内で精一杯活動する。その事が神様がお与え下さった役割であると思いました。

この丘の上を通りかかった人が、幼児の存在にホッと一息つく。幼児の元気に潤される。そんな小さなオアシスに、小さなガリラヤ湖になればと祈っています。

教師の堅い心、幼児が見えない目で、R園が死海になったら、どうしましょう。

(霊南坂幼稚園)